

## ねがいのいえニュース 第57号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2020年6月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



まるでSF映画のようなパンデミックの世界が展開する日々に、今もまだ信じられない思いです。誰もが直面しうる死への恐怖と当たり前の日常を奪われる苛立ちに、社会が殺伐になってきたとも感じます。すでにオリンピックが史上初めて延期され、あらゆるイベントや大会が中止になっていますが、さらに経済活動が低迷して失業者があふれていたら社会はどうなってしまうのか、今はまだ補助金が下りている福祉サービスも税収が減り制度が破綻したら、みなさまへの支援は打ち切られ、私たちも仕事を失うかもしれません。

不安の尽きない毎日ですが、「クラウドファンディングなどのツールが現れたこともあり、支援したいと思った人がその想いを実現しやすい社会になった。毎年のようにどこかでたくさんの方が被災され悲しい目にあうのが当たり前の世の中になって、誰かが困った時に何かしてあげたいと思う人が増え、社会が優しくなった」という湯浅誠氏のコメントを聞いた時、少しほっとした気持ちになりました。

ねがいのいえも利用の自粛がありここ2カ月は赤字になりました。今回は活動の報告は控えめにして、最近の想いとコロナ終息後の展開について随想風に伝えることにします。

### 地域生活元年からこれまで

障害のある人にとっての地域生活元年と言われた2003年以降、制度はどんどん洗練されていき、今や施設入所の人よりもグループホームで暮らす人のほうが多い時代が到来しました。その2003年にスタートしたねがいのいえも恩恵に預かるように、子どもの時に出会った利用者のみなさまの成長に合わせて支援を拡大し、今、家族から自立した暮らしを支援する時を迎えています。

出会った方の生涯に寄り添うことにコミットするなら、一団体ができる範囲は数十人が精一杯でしょう。それはまるで大河の一滴ですが、しかしそのひとすずくも全国で多くの団体が力を合わせれば、やがてすべての人が、住みたい街で気に入った住まいを選び、豊かな人生を送る日が来るのかもしれない。

### 全国の先駆者たち

世の中のすべての人を支えることはできないが、出会った人は何があっても支えきろう。それを

すべての事業者がやってくれたらみんな支えられる。ねがいのいえはそのモデルでありたいと訴えてきたが一方で、そのような支援者に会えなかった人は誰にも支えてもらえないまま悲しみを背負い続けることになる。そして現実には、そのような人のほうがはるかに多いことも知っていた。

誰に出会うかの運によって格差が生まれる社会にならないことを願いつつ全国ネットのみなさんが、10年前に発案したのが安心コールセンターだったが、現実には難しいのではないかと自分には感じられた。しかし発案した大分の村上さんは、地域の事業者がスタッフを輪番で派遣する体制を整え、自分の利用者だけではなく地域の誰もが、困った時に24時間365日支えられるセンターを作り上げた。

高度な医療も必要とする難病の方などを主に支援している千葉の伊藤さんは、ひとり暮らしを始める前の練習をするための場所、と位置づけたグループホームをスタートさせる。呼吸器ユーザーのホーム自体が全国的に希少な中、さらにその先の未来社会を設計するような取組みである。

また静岡のあるヘルパー事業所は、行動障害のかたのひとり暮らしをホームではなくヘルパーで支える実践を始めている。こちらもまた、意思表示が難しい人のひとり暮らしを支援するという希少な未来派である。

日本における障害者支援の先駆者である南高愛隣会の松村さんからは10年前、「グループホームも自然ではない」「愛する人との暮らしが何より大切」と学んだが、やっとホームの整備を始めたねがいのいえは、ひとりひとりの人生の質を高める支援にはまだまだ手が届いていない。全国に存在する深い支援の体現者からは学ぶことばかりである。伊藤さんも村上さんも、その発想の素晴らしさとともに、妥協なき理念の高みを感じられる。

20年前、現場の不安とともにスタートした介護保険の渦中で、燦然と輝きを放ち注目を集めたのが、富山型宅老所と呼ばれる共生型福祉モデルだった。中でも、若き女性PTが自宅から始めて一躍名を馳せたのが「にぎやか」だった。理事長の阪井さんがその圧倒的人間力で磁石のように周囲の人々を引き寄せて、誰にとっても魅力ある安心の居場所を作り上げていた。先日、深夜のドキュメンタリーで久しぶりにその姿を拝見した。

10代で心を病んだ女性が「にぎやか」と出会い自分の居場所を見つけ、集まって来られる方たちを支える仕事に就いた。その場所で愛する人と出会い出産をしたエピソードだった。「私なんかが子どもを産んでいいの？」と自問しつつ、「にぎやか」でまるごと支えられながら育児に向き合っていた。様々な人が集まる混沌の中で利用者も支援者も境目のはっきりしない支え合いが生まれる「にぎやか」の喧騒は、阪井さんとともに20年経っても全く変わらない想いを貫いているようだった。

全国に散らばる素晴らしい先輩たちは、師であり仲間である。われわれはいつも刺激を与え合い成長し合う。ねがいのいえは普通のことしかやってなくて自慢することもないが、ある利用者は、他の施設のショートステイに行くのが嫌で、ねがいのいえのショートステイは楽しみにしているとされた。しかし私たちは何も特別なことをしていない。お風呂に入りご飯を食べて、みんなでおしゃべりをしながらTVを見ているうちに寝る時間になり、トイレを済ませて布団に入る。ただそれ



だけである。何を楽しみにしてくださっているのかわからないと言うと、他の施設では早い時間に夕食が終わり、早々にオムツをつけられてベッドに入れられ、そのまま朝を迎えるという。高いレベルの人たちが素晴らしい実践をしている一方で、この国の標準的な施設福祉はまだこんなレベルである象徴と言える。特別ではなくただ普通だけで勝ってしまう業界である。いい事業所と言われて天狗になってはいけないのだ。



## 卒業後に戻ってくる人たち

他の事業所では受け入れてもらえずにねがいのいえを頼って来られる方が多い中、温厚で介助が少なく、他の事業所でも受け入れてもらえそうな方には、児童デイを卒業後、極力他の通所を探していただけるようお願いしてきた。というのも、ホームの整備を進めている団体はこの地域にはまだ少なく、家族から自立する時にはねがいのいえのホームが受けることになるであろう。その時に、日中も夜間も同じ団体では本人の世界が広がらないと考えたからである。

そして今、児童デイを卒業して他団体の生活介護に通われていた方たちが、数年経ち、それぞれの通所先でうまくいなくなるケースがぼつりぼつりと現れてきた。休日やショートステイの利用で来られた時に、自傷行為が止まらない、不眠や早朝の覚醒が続く、こだわりが強くなり日常生活が成り立たない、などの行動が激しくなったり、その都度、私たちの心のケアの技術を駆使して癒すが、心のケアは小手先のテクニックではなく毎日の生活の充実が重要である。私たちと過ごす時間だけ癒しても、多くの時間を過ごす毎日が苦しければ、現状維持か、悪化の速度を緩めるのが精一杯だ。

医療依存度が高くなったために通えなくなったという方もあった。どんな状況になろうと通い慣れたところで過ごして欲しいという想いは裏腹に、ねがいのいえの生活介護やじろべえに転向することを勧める方が年に数名現れる。

転向して数日は生活パターンの変化でいったん行動が悪化するが、新たに通うことになったやじろべえのスタッフは、慣れ親しんだねがいのいえのスタッフと同様、気持ちに寄り添ってくれる人たちであることがわかってきて、数日のうちに落ち着いてゆく。この1ヶ月はコロナの影響で変則が続き一進一退を繰り返したが、睡眠は少しずつ安定に向かっている。

## やじろべえの学習会

そのやじろべえは、農作業を通して身体を動かすことを主な活動にしているので、それ自体がストレスを発散する心のケアに通じている。そして、言葉の話しえない重度な知的障害の方たちでも、内面の成長を信じ年齢相応の関わりをする基本理念のもと、高度な学習会を取り入れている。

子ども番組ばかり見せられることの多い方たちが、障害のある人の情報や、災害についてのドキュメンタリーなどを見て、自分の人生について考え、世の中で起きていることについて学ぶ。行動障害と呼ばれる彼らが、静寂を保ち立ち歩きもなく集中している様子は、何もわからない人たちと

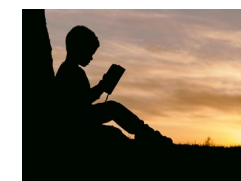
思い込んでいるみなさんに、ぜひ見ていただきたい姿である。

そして障害のある人たちが書いた本を読み聞かせする時、彼らは特に真剣だ。読み進む量は一度に数ページずつで年に1冊くらいのペースだが、自分と同じ想いを代弁してくれることに深く打たれている様子が伝わってくる。これまでに東田直樹さんの著書や、東田さんと同じように重度の知的障害と言われながらパソコンで自分の想いを表現するアメリカの少年、イドケダーさんの「自閉症の僕がありがとうを言えるまで」などを読破した。

そして今取り組んでいるのは、言葉の話しえない人の気持ちを行動から読み解く「お心主義」で有名な明星学園の宮下智氏の著書、「本当の気持ちと出会うとき～見えない心と心を紡ぐ意思決定支援の物語」だ。すべての行動には意味がある、と断言する宮下氏が、決してあきらめずに本当の気持ちを見つけるまでのプロセスは、支援員の教科書そのものである。成人を子ども扱いしてはいけないといくら伝えても実感をもって理解できないスタッフは何度も同じ過ちを繰り返すが、この学習会の時間は、利用者とともにスタッフもまた成長する時間なのだ。

先日の学習会では、読み聞かせの最後に自分の今の想いを伝えた。

「言葉で気持ちを伝えることができない人が、言いたいことをひとつでも誰かにわかってもらった時、人生が変わるほどの喜びを経験することでしょう。みなさんも今まで気持ちを理解してもらえずにたくさんのかんじを諦めてきたと思いますが、決して諦めないでください。われわれスタッフもみんな、いつもみなさんの気持ちをわかろうと勉強しています。」



そしてわかってもらえる気持ちをひとつひとつ積み上げていった先に、今よりも幸せな人生がきっと待っています。今よりももっと幸せになるために、これからも一緒に学んでいきましょう」スタッフも利用者もともに、真剣に受け取ってくれたと感じられる時間だった。

## そして次を目指す時代

障害のある人が遠くの施設へ旅立つことなく、生まれ育った町やあるいは自ら住みたいと選択した町で暮らすことができる時代はもうすぐそこまで来ているのかもしれない。その時代をともに生きる私たちが次に目指すのは何か？

北海道から沖縄まで、全国の先進団体を視察に巡った。そして自分の胸に最も深い感銘を刻んだのは、障害がある人もない人も、世代を超えて様々な人が行き交い集い合う「ごちゃまぜ」の環境の中に、優しい風が吹き渡る街づくりを実現した、石川県の仏子園である。

そして今、ひとつ胸に秘めているのは、障害のある人だけが集まることはもうしたくない、という想いだ。今後、組織の拡大を避けて通れないねがいのいえだが、これからの事業展開は、地域の誰もが出入りし困っている人は誰でも支え合える、そんな事業所づくりを目指したいと思う。奇しくもねがいのいえが拠点を置く西大宮は、全国一と言えるほど急速な開発が進む新しい街づくりの真っ最中であり、この開発の波に乗って、これまで学んできたことの実践、そして次世代へ継承する団体の基盤を作り上げたいと願う日々である。